

第三十三回 ICANAS に出席して

谷 中 信 一

一 はじめに

カナダ最大の都市トロント市のほぼ中心部に位置し、観光名所として美しいキャンパスを誇るトロント大學で、一九九〇年八月十九日（日）から二五日（土）までの一週間、第三三回國際アジア・北アフリカ研究會議（略稱 ICANAS）が、「文化の相互接觸」を共通テーマに開催された。

この國際會議の最大の特徴は、出席者のほぼ全員が発表者でもあるということであろうか。すなわち、いま手元にある参加者名簿を見ると、事前に参加手続きを取っていた参加決定者の總數は一、一五〇人（同伴の婦人も含む）なのに對して、プログラムに記載された発表決定者の總數は、延べ一、〇二〇人の多きを數えるのである。参加者の國籍は、東西

を問わずほぼ全世界の國々を網羅しているのではなからうかと思われるばかりだが、會議の實質的な共通語は英語であった。

ここで ICANAS について少し紹介しておこう。本會議の來歴は古く、一八七三年にパリで第一回が開催されたのに始まる。當初の名稱が、「International Congress of Orientalists」であったこと、そしてアジア地域で初めて開催されたのが一九六四年第二六回のニューデリーであったことを見れば、西歐系の學者を中心に長年運営されてきた會議であることがわかる。一九八三年に、アジア・北アフリカ國際人文科學者會議（略稱 CISHAAN）の名で東京で開催されたことは、まだ記憶に新しい。この時もそうであったが、わが國においては、今回も東方學會が ICANAS 日本委員會を總

括してこの運営に當っており、日本からは神田信夫東方學會東京支部長を團長とする約三十五名（家族同伴も含む）の團體と現地集合の五名とが参加したのである。なお、遲滞なく出發し成功裡に歸國できたのも同學會事務局長の柳瀬廣氏のご盡力の賜であつた。記して謝意を表したい。

二 會議の概要

會議の概要をできるだけ詳細に紹介するべきであらうが、實に盛りだくさんなため全くそれは不可能である。正味五日間の日程の中に、極めて細分化された部會が設けられ、問題毎に設定された討論會 (Panel, Round Table) もあつて、息もつかせぬ濃密さである。参加者個々にとっては、みな平等に發表の機會を與えられたことは幸いとすべきだが（但し聴衆が極めて少數であることは覺悟せねばならぬ）、その反面で、同じ時間帶に並行して興味ある發表がなされることもあり、そのジレンマに悩むということにもなる。が、たとえ少數者の間ではあつても、意見の自由な交換に重點が置かれたことはまことに意義深い學會であつたといえよう。夕方から夜にかけては、有料ではあつたが、歌舞音曲の特別企畫も用意されていた。

第三十三回 ICANASS に出席して（谷中）

さて本會議がカバーする地域、國家、及び主題を列舉すると次のようになる。

地域：古代近東、中東、中央アジア、東アジア、東南ア

ジア、西南アジア

國家：インド、中國、日本、韓國、タイ、スリランカ

主題：科學史、文化交流、書誌學、醫學、データベー

ス・コンピューター

關係：中國と臺灣、中國と日本、中國とインド、中國と

中央アジア、日本と中國、日本と西方、インドと

西南アジア、インドと西アジア、インドとチベッ

ト、中東と北アフリカ

これによってほぼ凡ての領域を網羅していることに氣附くであらう。

さらに中國にだけ絞つてその部會を舉げると、

文學ⅠⅡⅢⅣ、神秘主義と哲學、詩、道家ⅠⅡ、道教

Ⅰ、古代史、キリスト教傳道史と文化の接觸ⅠⅡ、人民

共和國、言語學史、中世史、滿州史、言語、哲學及び科

學思想、現代史、儒教と道教、美術史、香港、文化並び

に社會史、歴史と變化、地方史、宗教—佛教、比較宗

教、象徴と儀禮、中國と日本の現代政治、中國とインド

の文化接觸

などがあり、また討論會 (Panel) として、

中國の教育、天安門以後の中國、中國と韓國の法制史、西歐社會思想と政治的社會的發展、十九世紀中國學の文物、敦煌雲崗藝術

などがあつた。

全體としてみると、問題を歴史的な視點から扱つたものが多いこと、道家道教を取り上げたものに比較して儒學儒教の少ないことなどが目立つとともに、現代中國に對する關心の極めて高いことが印象的であつた。

三 發表要旨の紹介

以下に中國思想史に限定していくつかの發表レジュメを紹介しておこう。これによっておおよその傾向がつかめることと思う。

- (1) ドナルド・ホルツマン氏「紀元二五〇年前後の、道教の仙人と宮廷に仕える者との關係について」
- (2) ハロルド・ロス氏「初期道家における内的自然(性)の概念の發達について」

「性」を内的自然を言い表す概念と規定したうえで、この「性」の語が、思想史上極めて重要であつたにも拘らず、『老子』・『莊子』内篇などの初期道家の代表文獻に用例がないために、從來専ら儒家思想との關連から考察されてきたのは遺憾であるとして、發表者は、『淮南子』・馬王堆出土の「黃帝書」・『管子』・『呂氏春秋』などを資料に「性」の概念の發展についての道家思想の貢獻を明らかにしようと試みる。

- (3) ロ・ユエクン氏「後漢末道教における天命觀と應報」

天は人の行爲の是非に應じてその個人にばかりかその子孫に禍福を下すことがあるとして、いわゆる「祖先から相續された應報」という觀念が生まれたが、これで豫期しない運命やいわれなき悲運は一應の説明がなされることになった。しかしこの觀念は、同時に人を道德性の獲得は無意味と考えるいわば宿命論に導きうる。つまり報酬や罰が既に豫定されているのに、あえて苦勞して道德的人生を生きようとは考えなくなるであらう、として、この「先祖から相續された應報」についての道教上の教理を明らかにし、併せて道教の教化とその教理に固有な運命信仰との緊張關係を考察しようと試みる。

- (4) アラン・チャン氏「嚴遵(君平)の『老子指歸』について」

て」

後漢代を中心とする初期の『老子』解釋は、現存する文獻が極めて少ないので再構成が困難なものの、年代順に舉げれば、嚴遵（君平）の『老子指歸』、河上公注『老子』、『老子想爾注』となり、たしかにその内容も政治的關心から養生的關心へと次第に移っていくことが跡づけられると確認したあと、このうち最も古く、かつ政治的關心が最も強調される『老子指歸』についてその眞偽を検討しようと試みる。

(5) 劉笑敢氏「道家の『無爲』理論の發展と變化」、

道家の「無爲」の概念は、春秋末から漢初にかけて、常に變化し續けてきたとして、次のようにその意味の變遷を跡づける。

- ① 無爲理論の發生（老子） ② 無爲と養生（楊朱學派）
- ③ 無爲の極端化（莊子、『莊子』內篇） ④ 無爲の藝術化（莊子後學の述莊派、『莊子』外雜篇の秋水／寓言、列御寇の十二篇）
- ⑤ 無爲と性命の情（莊子後學の無君派、『莊子』外雜篇の在宥上、駢拇／胠篋、讓王、盜跖、漁夫の七篇）
- ⑥ 無爲の政治化（莊子後學の黃老派、『莊子』外雜篇の在宥下、天地／繕性、天下の七篇）
- ⑦ 無爲の理性化（漢代黃老派、『淮南子』原道、修務の各篇）

第三十三回 ICANAS に出席して（谷中）

これには異論も出たようであり、また「黃老派」をどう見るかに集中して意見が出された。

(6) 谷中信一「『老子』と『管子』——その形成過程について」

①なぜ『管子』は『老子』を引用しないのか、②にもかかわらずなぜ『管子』中に『老子』と共通する思想が多見するのか、③『老子』の成立と『管子』の成立に共通の思想的背景があるとすればそれは何か、といった問題から出發して、『老子』の二段階（楚文化＋齊文化）成立説を立てた。

(7) ダニエル・オーバーマイヤ氏「羅清（一四四二—一五二七）とその『苦功悟道卷』」

道教史上必ずしも著名であったとは思われない明代の道教指導者羅清（一四四二—一五二七）を取り上げて、彼の著『苦功悟道卷』を通して、彼の思想を紹介しようとするものの。

(8) バースロミュー・ツイ氏「南中國における全眞教の傳導」

金代の王重陽によって始められた全眞教が、南傳（廣東、香港方面）してから現代に至るまで、宗派としての中心的な要素は不變ではあっても、教義・儀禮に大きな變化が生じた

として、その實踐面から論じたもの

- (9) アルビン・オースチン氏「山西精神 (= spirit)、キリスト教と道教の調和宗派一八八〇—一九〇〇」

(以上、「道家道教」部會)

- (10) ヤン・ショウチン氏「道の分裂—初期儒家と道家の類似性と相違點—」

儒家と道家の掲げる「道」が始めは同じであつたことを先ず言い、しかしながらやがて、儒家は「創造的變化の徳」を、道家は「自然的發展の傾向」をそれぞれ基本的な教義とするに至つて、前者は「自己を恭敬に保ちつつ、他者に誠實であらうとすること」に、後者は「自己に誠實であらうとすること」に、古代以來の「道」の觀念の繼承のしかたが異なつていつたことを論じる。

- (11) レーン・ゴールドマン氏「世界の兩端で—マイモニデスと朱熹における知と徳の獲得—」

十二世紀の思想家マイモニデス（ユダヤ教の教理とアリストテレスの哲學を統合した説を立て、中世キリスト教に影響を與えたとされる）と、同時代の朱熹の思想を、知と徳の獲得のプロセスを中心に論じる。

- (12) ロイド・ジバン氏「王陽明の道德觀念における仁愛の役

割」

カント學派に代表されるヨーロッパ（アングロサクソン系）の「理性は道德的價值判斷に優先されねばならない」とする道德哲學の觀點を通して、王陽明の思想をみると、彼の道德的價值判斷に關しての説は、その實踐的役割を強調している點で、紛れもなく儒家の傳統思想を繼承していると論じる。

(以上、「儒教と道教」部會)

- (13) 栗原圭介氏「古代中國に於ける自然科學的思考の形成の起源について」

この問題については、農業の果たした役割の大きいことから曆に注目し、そこからの解明を試みる。

- (14) ミロスラフ・P・マリノフ氏「儒教に於ける人間の問題と東方の正統」

十九世紀ロシアの「もつとも偉大な宗教思想家の一人」であるニコライ・F・フィodorovと孔子の比較を「東方の正統」という視點に立つて兩者の共通性を指摘する。

(以上、「哲學科學思想」部會)

- (15) 岡田武彦氏「儒教と神祕主義」

儒教とは、人間關係を中心として人間性の發展と理想社會

の實現とを旨とするものであるとまず定義し、ついで神秘主義が理性主義と對立する概念であることを前提として、情意の訓練によって得られる内的直接的な經驗が人を眞理に導きうるとして、儒教における神秘主義がいわゆる情意主義に外ならないことを言う。

〔神秘主義と哲學〕部會)

(16) ナット・ウルフ氏「西歐社會に與えた道家思想の影響」

西歐ではこの二〇年間道家について、祕密めいた宗教という理解から、次第にその哲學的意義に對する關心へと移行するとともに、その關心自體も擴大しているとして、これまで公刊された多くの道家思想に關する新しい翻譯や研究論文の目錄をデータベース化することの有功性を提唱する。

〔比較宗教〕部會)

この他、本學會關係者の發表を紹介すると、

(17) 村山吉廣先生「ジェームズ・レッジと中國―彼の詩經の翻譯を中心に―」

①レッジは中國の傳統的な詩經解釋にはよく通じており、特に朱子のそれを採用していること、②彼の翻譯には、王韜の實質的な協力があつたこと、の二點を明らかにされた。

〔キリスト教傳道史と文化接觸〕部會)

第三十三回 I C A N A S に出席して (谷中)

(18) 福井文雅先生「都講―インド佛教の注釋者―の役割の中國及び日本に於ける變容」

〔宗教―佛教〕部會)

(19) 高崎直道先生の「ブッダ―慈悲を本質とするもの」

〔大乘佛教を含む佛教全般〕部會)

四 おわりに

僅か數日間のことではあつたが、こうした國際會議に出席して感じたことは、各國の中國學者と共通の「土俵」を持つためにも、またわれわれの學說が國際的通説として廣く受け入れられていくためにも、今後一層英語等による研究の發表・交流が缺かせないのではないかということであつた。

三、四年に一度の開催ということから多少のお祭り気分もないではなかつたが、何よりも印象的だったのは、「日本文化はユニークか」というラウンドテーブル形式の日本をめぐる討論會がありはしたものの、全體としては中國の存在感の大きさであつた。既に觸れたように、天安門事件・香港問題など現代中國を巡る政治情勢なども議論の對象となり、天安門事件以來パリに亡命中の嚴家其氏らも參加して、中國の民主化の將來について熱心な議論が交わされていた。

また、カナダのマニトバ大學に留學中の四川省出身のある道教研究者が、自分は卿希泰氏の教え子であることを先ず明かしたうえで、ぜひとも道教研究のために日本に留學したいが可能であるかと相談された。日本では留學生に對する經濟的援助が必ずしも十分ではないことを説明したところ、相當落膽していたようでそれ以後再度の相談は受けていない。残念なことである。

この他印象に残ったことは數多い。例えば、オンタリオ王立博物館の中國關係のコレクションの充實ぶりに目を見張ったこと。正味僅か一時間のナイアガラの瀧見物ではあったが世界一の瀧の凄さに驚き、會議の疲れもしばし忘れる程であったこと。トロント市内の中國人街のむせかえるような活氣。市内の地下鐵に乗り、また目抜き通りを歩いて目にする人々の肌の色の多様さ。筆者にとり言葉のハンディーは少なかつたものの、收穫は思ひの外大きかつたといえようか。次回は一九九三年夏に香港で開催されることが決定している。

なお、本學會の報告は以下に紹介する四誌にも詳しい。ぜひ参照していただきたい。

- ① 「東方學會報」No.五九（一九九〇）部會報告（高崎直道先生が「佛教研究」を、また福井文雅先生が「中國學關係——前近代を中心に」をそれぞれ擔當）
- ② 「通信」第十二號（一九九〇、日佛東洋學會）國際會議欄（福井文雅先生）
- ③ 「新しい漢文教育」第十一號（一九九〇、全國漢文教育學會）學會展望（國外）欄（村山吉廣先生）
- ④ 「中國古典研究」第三十五號（一九九〇、十二月、中國古典研究會）「トロント紀行——第33回國際アジア北アフリカ會議に出席して——」（村山吉廣先生）